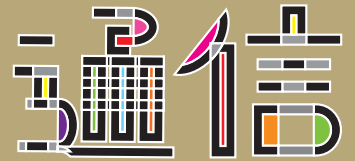


Office of Promoting Gender Equality in Tokyo Gakugei Univ.

Vol.22
September.19



第13回男女共同参画フォーラムが開催されました

第13回男女共同参画フォーラムは平成23年度 OPGE 助成報告会として6月27日(水)に開催され、平成23年度に東京学芸大学男女共同参画推進本部 (Office of Promoting Gender Equality [OPGE]) の助成を受けた三件の研究について、それぞれの代表者より概要の説明と成果の報告が行われました。当日はちょうど内閣府男女共同参画推進本部によって設けられた男女共同参画週間の中日ということもあり、たくさんの方々のご参加を頂くことができました。今回登壇頂いた三氏のお話はいずれも男女共同参画に関わるジェンダー問題について深く考えさせる内容であり、会場の方々が真剣に聞き入っていた様子がとても印象的でした。

及川英二郎氏は、水俣病の教訓を伝える教材の開発を念頭に、文献調査と現地での実地調査を行い、最終的に学生らと小金井祭での展示を実施するまでの過程を報告しました。文明病としての水俣問題の中に潜む「放置しても良い」という人の心のあり方が被害を広める要因となったことや、実は水俣の経済的発展の象徴として「遊郭」の存在が認知されていた面があることなどが紹介されました。質疑応答の中で「ある差別が別の差別を見えなくすることもある」など、ジェンダーと絡めた議論が行われました。

続く宿谷晃弘氏の研究は、社会に形成されたジェンダー秩序は強固で、単なる法制度改革だけでは不十分ではないかという認識から、法教育によって人々の意識を変革しようというものでした。具体的な事例・問題としてドメスティック・バイオレンスや児童虐待を取り上げ、すでに行われている実践例を調査した結果をもとに構築した教育プログラム案を紹介、結論では、教育だけでなく実際の紛争解決システムとの連動が必要だと強調されていました。鈴木秀人は女子ラグビーの歴史と諸問題の背景を調査し、男子との合同練習における諸状況から女子ラグビー選手育成に有効な点および課題に関し明らかとなったことについて報告されました。学生とともにラグビーの本場である英国で現地調査された様子をユーモアを交えて紹介され、日本との比較、柔道との比較、ジェンダーに関わる課題などが説明されました。「もっともマンリーなスポーツ」であるラグビーの開放の歴史と現在の課題はとても興味深く、閉会後も活発な意見の交換が聞かれました。

■ OPGE 助成研究 発表要旨

「水俣 — 民衆・ジェンダー・植民地主義 —」

人文社会科学系 及川英二郎

本活動の目的は、水俣病の教訓を、教材開発という観点から整理し、小金井祭で展示することである。そのさい、以下の三点を重視した。

第一に、水俣病を「文明」や「近代」「工業社会」といった問題に還元するのではなく、加害企業チッソや行政に見られた「放置してもよい」という心性に着目し、罪責の所在を明確にした。



そのうえで第二に、当問題を過去の他人事とせず、「差別に連なる私たち」への気づきを得るため、加害と被害が交錯する生活者の実像を、「民衆」という視点で強調した。

そして第三に、ジェンダーの視点である。天草地方に多く見られる「からゆきさん」をはじめ、チッソとともに地域に根付いた「遊郭」の存在。また、水俣病に罹患した老婆の体験談を書き留めた角田豊子「天草の女」（『水俣の啓示』）では、「慰安所」の女将として中国各地を日本軍とともに転戦した半生が語られている。そのことをふまえ、上記「民衆」の視点とあわせて、ここではまず、ライフヒストリーという視点の重要性を強調したい。水俣病事件の経験を伝えるとは、そうした生の全体像においてリアリティを伝えることにほかならないからである。

また、地域にチッソがもたらした「恩恵」の1つが「遊郭」であったという事実は、チッソへの「あこがれ」を強化し、チッソなしでは存立し得ない地域社会の心的基盤を形成した。「遊郭」の存在は、“チッソ城下町”の繁栄のシンボルであり、そうした形でチッソを美化する心性が定着することで、「放置してもよい」という心性もまた、より強固に醸成されていったと思われる。

原田正純の言葉を借りれば、水俣病の本質は“人を人と思わない状況”、すなわち差別である。それは単に、公害病患者に対する差別を言うのではなく、水俣に存在する複合的な差別構造が、水俣病を誘発し放置してきたという含意である。今日、原発問題で繰り返されていることも、便利さへの依存や科学への過信だけではなく、その奥にこの差別構造を確認する必要があるだろう。

「法教育におけるドメスティック・バイオレンスのプログラム構築」



人文社会科学系 宿谷晃弘(研究代表者)

附属国際中等教育学校 石津みどり

青山学院大学教育人間科学部 蔵元幸二

東北公益文科大学公益学部 竹原幸太

東京大学大学院教育学研究科 山辺恵理子

近時のジェンダー正義を求める声の高まり、さらにはその声を受けての法制度の整備にもかかわらず、現実の社会においてはジェンダー秩序はあくまで強固なものとして存続している。もちろん、法制度を改変していくことは重要である。しかし、

上記の事実は、次のような事柄を我々に示しているといつてよいであろう。それは、つまり、法制度の改変だけでは、ジェンダー秩序の土台を切り崩すことはできないということである。

本報告においては、このような認識をもとに、法教育の可能性に着目した。近代法の諸原理は、ジェンダーの観点からも何かと議論のあるところではあるが、個人の尊厳等から出発する近代法の諸原理は、その適用の実態はともかく、基本的に、ジェンダー正義と一致するものと考えられる。そして、法教育が、そのようなものとしての近代法の諸原理を土台とするものであるならば、それはジェンダー秩序に対して、より根底的な影響力を行使し得るものとなるように思われるのである。

本報告においては、このような前提のもと、あえてドメスティック・バイオレンス(以下、「DV」と表記)に着目しつつ、法教育プログラムを構築することを目指した。法教育においてDVを取り扱うことについては、例えば、それがDVに関する被害を受けている子どもに対して与え得る影響など、何かと問題が予測され得るであろう。そこで、本報告においては、CAPや湘南DVサポートセンターなどのプログラムを参照しつつ、DVを中心とした法教育プログラムを構築した。

本プログラムの特徴を端的にまとめるならば、次のようになるであろう。つまり、①事後の手厚いケアの体制の構築をも視野に入れること、②子どもたちの学習だけでなく、教員や地域の大人を含めた研修体制の整備に注目していること、③学校だけではなく、NPO・NGOなどの力に着目し、それらの活用を促進しようとしていること、などである。これまで学校はその閉鎖性を指摘されてきた。本プログラムは、これに対して、学校を社会に開き、社会と学校が一体となって人権問題に取り組み、ジェンダー秩序を改変していく基盤となることを目指すものである。

「国際レベルの女子ラグビー選手育成プログラムに関する基礎的研究 ～男子大学生選手との合同練習を核にした育成における有効性と問題の検討～」

芸術スポーツ科学系 鈴木秀人



本学に、ラグビーの18歳以下女子日本代表選手が入学してきたことを契機に、当該の女子学生の可能性を最大限に伸ばすため、他の多くの大学ラグビー部とは異なり本学ラグビー部への入部を認めたことに伴い、男子大学生選手たちとの通常のトレーニングを核に、それと週1回の女子クラブでの活動および代表候補選手合宿等との連携をはかりつつ、国際レベルの女子ラグビー選手を育成するための取り組みを始めたのが研究の動機である。

本研究では、これまでの女子ラグビーの歴史やそこに見られる諸問題の背景を明らかにした上で、日常の男子大学生とのトレーニングの中で女子選手に生じる様々な状況について、当該選手へのインタビューや練習日誌の分析、研究代表者らによる参与観察、男子選手たちへのインタビュー等その他の資料から、かかる形態での選手育成の有効な点と解決すべき課題に分けて明らかにした。

英国における調査では、ラグビーが女性への解放が他のスポーツより遅れた歴史的背景をパブリック・スクールにおける調査から探り、同様の歴史は日本でも確認することができた。現状における課題として、日本では大学卒業後のプレー継続のための環境が英国に比べて大きく劣ることが明らかとなった。日本の女子柔道との比較においては、ラグビーに見られた女子の排斥のような状況は柔道にはなかったことが確認できた。

通常のトレーニングの有効性については、フィットネス面よりも戦術的行動の習得に見出された。一方で、柔道のような1対1での格闘とは異なる集団での接触場面であるブレイクダウンの局面において、男女が一緒に練習することの難しさが改めて認識されることとなった。この解決は、今後の課題として残された。



男女共同参画支援室からのお知らせ

■ 子育て交流会

日時：10月26日(金) 12:00～12:50 場所：第1むさしのホール1階 教職員ラウンジ

今回のテーマ：「仕事・研究と子育ての両立 - どうする？ 小学校からの保育と教育 -」

5月に好評だった子育て交流会の第2弾を開催します。今回から対象を拡げ、子育て中や子育てに興味のある本学の教員・職員・学生ならどなたでもご参加いただけるようになりました。子育てに関する疑問や体験談を共有し、子育ての輪をひろげましょう！

■ ∞(無限)の会

日時：11月8日(木) 12:00～12:50 場所：第1むさしのホール1階 教職員ラウンジ

本学の女性教員を対象としたランチ会、∞の会を開催します。∞の会は、毎回リラックスした環境で情報交換・交流・ディスカッションを行える場となっています。女性教員の皆様、お誘いあわせの上ぜひご参加ください。

■ 男女共同参画支援室・学芸カフェテリア共催イベント

「女性研究者へのキャリアパス - 院生・卒業生と語ろう！ -」

日時：12月19日(水) 14:30～16:30 場所：学芸カフェテリア・オフィス 対象：本学在学学生

研究現場で活躍している大学院生と卒業生をスピーカーとして迎え、院生・卒業生・学部生の交流会を開催します。研究者としてのキャリアに興味のある学生の皆さん、奮ってご参加ください！

■ 附属学校初任者研修で男女共同参画に関するワークショップを行いました

8月20日、本学附属学校初任者研修「校外研修A」で、初任者7名を対象に「男女共同参画社会について」と題したワークショップを支援室常田コーディネーターと八木カウンセラーが担当しました。前半では男女共同参画社会について解説し、日本の現状と国の政策をさまざまなデータを用いて紹介しました。さらに本学の男女共同参画に関する基本理念、基本方針を踏まえて、学校教育と男女共同参画、「隠れたカリキュラム」の存在について講義を行いました。後半は講義を参考に、グループディスカッションで「隠れたカリキュラム」を検討しご発表いただきました。また具体的な改善案と取り組みについて考えていただきました。附属学校初任者研修での男女共同参画に関するワークショップは初めての試みでしたが、参加された先生方にも積極的にご検討いただくことができました。



育児は快樂である。 人文社会科学系 齋藤一久

育児は「快樂である……新生児を風呂に入れてやる。大きく開いた左の手のひらに赤ん坊の後頭部を置き、親指と小指で両の耳をふさいで、背中から尻までを下腕に乗せ、ガーゼの肌着を脱がせないまま浴槽に入れる。……赤ん坊はいかにも満足げにしている。自分が温泉に浸かる以上の快樂だ」(池澤夏樹：角田光代『八日目の蟬』(中公文庫)の解説より)。

今、3歳になる息子を寝かしつけ、これでやっと仕事に取りかかると、ホット一息ついている私としては、すでに育児＝快樂とは言えないというのが正直なところです。それゆえ読者の皆さんに子育てについて語れるような内容はとくにありません。

といって、ここで終わると、OPEG通信に穴を開けるので、私が小平市小川の職員宿舎に住んでいることもあり、そこでの子育て環境について「イクメン」の観点から、少し書きたいと思います。

やはり子どもを預けられる環境があるかどうか重要なポイントですが、他の自治体同様、小平市の保育園に0歳から子どもを預けることは、本学の教職員の場合、かなり絶望的です。それ以降も非常に難しいと聞いています。私の場合は、運よく、子どもが6か月のときに、近くに認定子ども園として〇凸保育園ができたので、入れましたが、その前は市役所に申請に行くと、次回の申請の話をされて帰るだけでした。3歳からは同じ系列の〇凸幼稚園(宿舎御用達!?)に通っています。延長保育を行っており、月プラス1万円程度で朝7時半から夕方6時半まで預かってもらえます。

学内で、なぜ学芸の森保育園に入れなのかと質問されることがよくあるのですが、小川から通うとなると、かなりハードルが高いと言わざるを得ません。たとえばベビーカーに乗せて電車まで連れて行くとなると、朝のラッシュの中、西武線からJRに国分寺駅で乗り換え、武蔵小金井駅まで行かなければなりません。昨年度の大学入試センターの際に子どもを預かってもらったこともあり、学芸の森保育園が設備・環境ともに素晴らしいのは分かっているのですが、保育料が〇凸保育園よりも月1万円ほど高く、パートナーが学芸大とは関係のない職場なので、宿舎近くの保育園を選ばざるを得ませんでした。

次に育児用品の購入についてですが、東大和に△チャン本舗や□松屋がありますので、心配はありません。もっとも車がないと、アクセス不可能です。たとえ頑張って自転車で行けたとしても、大量に消費される紙おむつを運ぶのは大変でしょう。この点、関係する課には駐車場や駐車場の割当について、機械的な割振ではなく、子育て支援の観点から、ぜひ配慮をお願いしたいところです。

以上、大した情報ではありませんが、今後、宿舎に入居して、子育てをしようと考えている若い教職員の皆さんに少しでもお役に立てれば幸いです。

息子の寝顔を見ていると、やはり子育ては快樂かもしれません。もう1ラウンドやってもいい気がしてきました。

【人事課職員係のお問い合わせ先】

人事課職員係 清水
内線：7123
E-mail：syokuin@u-gakugei.ac.jp
FAX：042-329-7127

東京学芸大学男女共同参画推進本部
〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL：042-329-7108 FAX：042-329-7114 E-mail：danjo@u-gakugei.ac.jp
URL：http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/ 詳しい情報等はホームページをご覧ください。

男女共同参画支援室
TEL/FAX：042-329-7894 E-mail：shien1@u-gakugei.ac.jp
URL：http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/support/

